

内側が透過していると、
深さは、隠そうとした場所から先に出てしまう。

すべては現れない。

けれど、
消えるわけでもない。

滲みは、
表現ではない。

意図でも、
技法でも、
自己開示でもない。

見せようとして起きるものではなく、
隠そうとしたときに、
そこだけが残る。

滲みは、
行為の手前にある。

内側に密度があり、
遮るものが少ないとき、
境界は機能しなくなる。

外側は、
触れるというより、
通過してしまう。

滲みは、
留まれなかった深さが、
そのまま外に出ている状態だ。

透明であることは、
何も足さないということに近い。

整えられていない深さは、
形を持たない。

だから、
声でもなく、
言葉でもなく、
沈黙のほうから先に現れる。

滲みは、
消えないものが、
形を持たずに残っているだけだ。

滲みは、
つくりことができない。

同時に、
消すこともできない。

整えた部分ではなく、
整えきれなかったところに残る。

そこに、
存在の深さが触れている。

A person is covered by a white sheet, with only one finger extended from the left side. The background is a bright, hazy sky with soft, wispy clouds. The overall mood is mysterious and ethereal.

内側が透過したとき、
深さは隠されるのではなく、
遅れて外に現れる。

Edition — 存在の芯
別景：滲むという構造

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026